森にありがとう

カンパク幼稚園に通うケン太一家のお話

表紙

2007.3.31

森にありがとう

Page 1

今日もとってもいい天気!

そんなある日曜日･･･
ケン太はいつものように森へ遊びにでかけました

Page 2

ケン太「おーい!」

ケン太「あれ･･･？」

いつもと様子が違います
いつもにぎやかな森の中がしーんと静まりかえっています

Page 3

仲良しのもぐらくんがいません
ケン太「モグラのもぐくーーん!」

仲良しのケロたんもチョウチョさんもいません
ケン太「カエルのケロたーーーん!」
ケン太「チョウチョのヒラリちゃーーーん!!」

ケン太「どうしたんだろう？」

Page 4

仲間をさがしていると
いつも遊んでいる小さな池までやってきました。

ケン太「水がない！」

なんということでしょう！
池の水が干上がってしまっています。

Page 5

まわりをよく見ると
青々と繁っていた森の木々たちも様子がへんです

ケン太はなにが起きたのか全くわかりません

ケン太「どうしてみんないないの？」

Page 6

いつも親切な樫の木のおじいさんに聞きました

樫の木「ほら、みてごらん」

悲しそうな顔で樫の木はこたえました

カーン･カーン･カーン
バリバリッ！ドーン！（切り倒す音）

木々は切り倒されて、
森の木々がどんどんなくなっています

Page 7

ゴゴゴゴ(ブルドーザー)
プップー!パパーーッ!(クラクション)

道ができて自動車がたくさん走り始めました

樫の木「みんなもうここには住めなくなってしまったんじゃよ‥」

Page 8

その時です!!

バリバリ、メキメキッ!!!
樫の木のおじいさんがケン太のほうへ倒れてきました

ケン太「わあああああーー!」

Page 9

朝の光と鳥の声(チュンチュン、ピチチチ‥‥)

ケン太「はあー、夢だったんだ‥‥よかった‥‥」

なんとケン太は夢を見ていたのです。

とっても怖い夢だったので
すぐにお父さんとお母さんに話しました。

Page 10

お母さん「まあ!かわいそうに･･･
でも心配しなくてもケン太の森は大丈夫よ」
お父さん「うーん･･･だが、もしかすると夢だけでは
すまないかもしれないよ」

そう言ってお父さんが森と人間のことを話しはじめました

Page 11

お父さん「森はすごいんだよ」(力をこめて)

お父さん「森の中は空気がきれいで
とっても気持ちいいだろう？」

ケン太「うん」

お父さん「それは、森が汚れた空気を吸って
きれいにすごしやすくしてくれてるんだ」
お父さん「森の役割はまだまだあるぞ!」

Page 12

お父さん「僕たちに大切な水もたくさん
たくわえてくれているんだ。
たくさん雨が降りすぎた時も森の木々の根っこが
山崩れをおさえてくれてるんだよ」

ケン太「うわあー･･･すごいなあ･･･」

お父さん「ケン太の大好きなカンパクの森公園もそうだけど
森はたくさんの生き物のすみかになっているんだ」

お母さん「あと、町の中にいない虫やきれいお花を
発見することもできるわね。そして大きな森は
すばらしい景色を見せてくれるでしょ？」

Page 13

お父さん「ケンタも思いつくことがあるかい？」

ケン太「えっと･･･あっ！そうだ！
とっても暑い日には日陰をつくってくれるよ！」

お父さん「うん、そうだね、
熱を吸収したり、強い風からも守ってくれるね」

ケン太は感心しっぱなしです。

お父さん「だけどね･･･」
お父さんの顔が少しくもりはじめました。

Page 14

お父さん「私たち人間は、その森の木をたくさん切って
トイレットペーパーやティッシュペーパー、
わりばし、ノートにしてたくさん使ってる」

お父さん「たくさん使って、たくさん捨てて･･･
森の中にゴミを捨ててしまう人もいるんだよ」

ケン太「そんなに使ってばっかり、捨ててばっかりだったら･･･」

お父さん「そうさ！どんどんどんどん使ってるから
森は少なくなってどんどん捨てるから
森は汚れていく･･･」

ケン太は悲しくなってしくしくと泣き出してしまいました

Page 15

お母さん「ケン太、泣かないで。
森をたすけるためにすこしずつ
努力している人がたくさんいるのよ」

ケン太「ほんとう？」

お母さん「お友達のゆうくんは自分のおはしを
いつも持っていて割り箸を使わないの。

ようこちゃんは絵を描くのが大好きだけど、
いつもチラシや余った紙のウラを使ってるのよ」

Page 16

ケン太「この間、たかしくんが渡り鳥の観察を
はじめたのも関係ある？」

お母さん「まあ、すてきね。 よく観察すれば
渡り鳥も森と生きてることがわかるわ」

ケン太「でも‥‥それでも
森の木は少なくなっているんでしょう？」

お母さん「そうね‥‥だけどいつかは大きな森になるようにって
山に木を植える活動をしている人たちもいるのよ」

ケン太「へえ！僕もやってみたいなあ！」

Page 17

お父さんとお母さんのお話を聞いてケン太は安心しました。
そしてなんだか急に森やその仲間にあいたくなってきました

ケン太「森にありがとうって言ってくる！」

そう言って家を飛び出して行きました

お父さん「いってらっしゃい！」
お母さん「いってらっしゃい！」

＜おわり＞